

[実践研究]

学生の英語コミュニケーション能力向上のための 同時双方向型遠隔授業による 指導・評価方法に関する実践研究

向 後 秀 明

A Practical Study on Teaching and Evaluation Methods to
Enhance Students' English Communication Capacity and Skills
through Synchronous Online Classes

KOHGO Hideaki

Almost all universities in Japan have been severely affected by Covid-19 in the 2020 academic year, and most teachers have had no choice but to conduct remote lessons. Students tend to develop their communicative competence through communication with teachers and peers in person using the target language, and it can be challenging to conduct language lessons online at first. However, if online teaching is the only option, teachers need to devise effective ways of doing so under restricted circumstances. The purpose of this paper is to show what should be prepared prior to starting English classes online, discuss some teaching and evaluation methods that I have explored through synchronous online classes, and compare students' learning achievements with those in face-to-face classes in the past few years. It also includes key requirements to enhance students' communication capacity and skills to express and exchange information and thoughts through language activities both in online and face-to-face classes.

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以降、「Covid-19」という）の拡大により、2020年度は日本国内ほとんどの大学が甚大な影響を受けた。基本的に面接授業を行ってきた教員が、学生を前にして授業を展開することができないという未曾有の危機にさらされた。筆者自身、これまで30年以上にわたって初等中等教育及び高等教育における各校種の英語教育に携わってきた経験から、また、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5つの領域における言語活動を総合的且つ統合的に扱うことによってコミュニケーション能力を育成していく英語科目の特質上、遠隔授業での指導は極めて困難であろうと当初は考えた。しかし、Covid-19の感染状況は悪化の一途を辿り、多少開始が遅れてもなんとか面接授業ができるようになるのではないかという期待は見事に外れた。これまでの面接授業による英語コミュニケーション能力の育成が当然であるという考えから、根本的な発想の転換が求められる事態に追い込まれたのである。

2020年度の筆者の担当科目は、前期が「College English I」、「College English III」、「English Presentation I」及び「2年次専門研究 I」の4科目、後期が「College English II」、「College English IV」、「English Presentation II」及び「2年次専門研究 II」の4科目で、いずれも基本的には国際学部国際学科の履修科目である。できるだけ面接授業による指導に近づけたという思いから、これら全ての科目を同時双方向型遠隔授業で行うこととした。本稿では、遠隔授業でも面接授業と遜色なく学生の英語コミュニケーション能力を育成するために、遠隔授業の開始までに計画・準備すべきこと及び遠隔授業における効果的な指導と評価の在り方について、どちらの授業方式であっても共通して必須となる英語指導上の要素を含め、2020年度の実践をベースに考察することとする。

2. 遠隔授業の開始までに計画・準備すべきこと

(1) 授業に関する情報伝達のための使用言語と 新入生へのフォロー

各期の授業開始前には、シラバス以外にも言語活動の具体的な展開方法や総括的評価を行う場面など、学生へ周知しておかなければならないことが多い。今年度は、これら通常の伝達事項に加え、遠隔授業に関する諸々の説明が必要となった。各科目の授業では、Zoom Video Communications, Inc. が提供するウェブ会議サービスである Zoom を使用することとしたが、アプリケーションのインストールから授業中の具体的な操作方法まで、詳細な指示をしなければならない。これまで、授業そのものはもとより、課題を含む授業に関する一切の説明は英語によって行ってきたが、ほとんどの学生にとって初めての経験となる遠隔授業について複雑な内容を説明するに当たって、使用言語をどうすべきか悩んだ。

今回限定の特例として日本語を使用することも考えたが、次の3点の理由により、従来通り全てを英語で行うこととした。

- ・科目の導入部分を日本語で行ってしまうと、英語の授業であっても日本語を使用できる雰囲気が出てしまい、英語のみによる授業展開に戻すことが難しくなる。
- ・「大切なことは日本語で」とは逆の発想で、「大切なことこそ英語で」という姿勢を示すことにより、学生は日本語でのフォローを期待できなため、英語を理解することに対する真剣さや集中度が高まると考えられる。
- ・高等学校学習指導要領「第8節 外国語 第3款 英語に関する各科目に共通する内容等 4」に、「英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行う

ことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。」と規定されており、2020年度入学生は少なくとも高等学校において基本的に英語で行われる授業を経験している。そのため、高大接続の観点からも英語の使用が適切である。

ただ、特に入学したばかりの1年生については不安が拭えなかったため、2020年4月28日に、本学のウェブサービス学生支援システムである「敬愛キャンパスナビゲータ」（以下、KCNという）を通して、「College English I」の「履修前伝達事項」をできるだけ平易な英語を用いて次のように発信した。

Classes will be conducted online for the time being. Here are what you need to prepare to join my class of "College English I" and understand before the first semester starts.

1. Buy the following textbook as soon as possible.
"STRETCH 2" (Level 2 Student's Book with Online Practice)
Oxford University Press (ISBN: 9780194603133)
2. Install "Zoom," which is an app that you will use in class. I strongly recommend you use a PC or a tablet, but you can use your smartphone if you do not have one.
⇒ See the attached manual on how to use Zoom.
3. Remember to check KCN (especially "Class Materials" in Class Profile) as well as Keiai Gmail before every class.
⇒ See the attached manual on how to use KCN.
4. Class starts at 9:00 on Tuesday, and at 10:45 on Thursday. To join each class, you need to access the Zoom URL that will be sent to you later through KCN. Please access it a few minutes before each class starts.
(後略)

上記の配信内容について疑問点があれば、KCNを通していつでも質問できることを併せて伝えたが、テキストの購入方法について数名から問い合わせがあったのみで、Zoomへのアクセスを含め、その他については問題なく理解されたようである。

(2) 学生の不安を軽減するための授業概要の事前配信

ほとんどの学生にとって初めての経験となる同時双方向型遠隔授業に対する不安感を少しでも和らげるために、最初の数時間については、主な活動内容を含めた「授業概要」を事前にKCNで配信した。これにより、

学生があらかじめ授業の流れを想像できるようにするとともに、必要に応じて各活動の準備ができるようにした。例えば、「College English I」の第1回目の授業については、次の内容を配信した。

Here is the information on the first class of “College English I.”

1. Date & Time: May 5 (Tue.) 9:00–10:30

2. Textbook: STRETCH 2 (Oxford University Press)

※In class, you can WATCH the textbook on your computer or tablet through Zoom, though you cannot download it.

3. Class Schedule

(1) Access the Zoom URL below a few minutes before 9:00.

※We will use the same URL for Tuesday’s classes. (The URL for Thursday’s classes is different.)

※Please keep in mind that you may have some technology problems in taking classes online. If you cannot enter the class, for example, please tell me your ID number, name, and the problem, using Q&A (Class Profile) on KCN.

(2) Introduce yourself (first in pairs or in groups, and then to the class) including your name, where you are from, and what you like to do in your free time.

⇒ See the attached example (PowerPoint file).

(3) Write down five things about yourself. You can leave Zoom for about 10 minutes to write them down. You should access the same URL above again to come back to class. Then, tell your friends what you wrote.

⇒ See the attached example (PowerPoint file).

(4) See the textbook on pages 2–4 (Unit 1 Hobbies 1 VOCABULARY AND LISTENING, 2 SPEAKING, 3 GRAMMAR). Work with your classmates following my directions.

(3) 遠隔授業における教材の公衆送信に係る許可申請

遠隔授業を実施するに当たって細心の注意を払わなければならないことの一つに、テキストを含む教材（著作物）の扱いがある。Covid-19の感染拡大により、教育機関において急速に需要が高まってきた遠隔授業の円滑な実施に向け、「授業目的公衆送信補償金制度」が当初の予定を早めて2020年4月28日に施行された。これにより、著作物を授業目的で公衆送信する場合、著作権者等の許諾を得ることなく、また2020年度に限っては緊急的且つ特例的な措置として無償での利用が可能となった。しかし、無許諾＝無条件で教材の公衆送信が可能、ということではない。改正著作権法第35条第1項に定められているように、著作物の公衆送信が「著作権者の利益を不当に害することとなる場合」の利用は、同制度施行後も認められていない。例えば、学生がテキストを購入しない状態で、

教員がテキストの一部又は全部を公衆送信によって学生に配信した場合、一般的には「著作権者の利益を不当に害することとなる場合」に当たる可能性が高いと言えるだろう。

用語の定義

⑨ 「著作権者の利益を不当に害することとなる場合」

改正著作権法第35条の範囲内で他人の著作物を無許諾・無償又は無許諾・有償（補償金）により利用する際には、授業の過程における著作物の利用にあたって、著作権者の権利を不当に害しないよう、即ち、学校等の教育機関で複製や公衆送信の利用行為が行われることによって、現実には市販物の売れ行きが低下したり、将来における著作物の潜在的販路を阻害したりすることのないよう、十分留意する必要がある。

もし、授業の過程における著作物の利用が著作権者の利益を不当に害する場合は、無許諾・無償又は無許諾・有償（補償金）で利用できる範囲を超えているものとして著作権者の許諾を得ることが求められる。

（中略）

② 高等教育

〈不当に害する可能性が高い例〉（一部抜粋）

例）授業を行う上で、教員等や履修者等が通常購入し、提供の契約をし又は貸与を受けて利用する教科書や、一人一人が演習のために直接記入する問題集等の資料（教員等が履修者等に対して購入を指示したものを含む。）に掲載された著作物について、それらが掲載されている資料の購入等の代替となるような態様で複製や公衆送信すること

（参考）『改正著作権法第35条運用指針（令和2〔2020〕年度版）』（2020年4月16日、著作権の教育利用に関する関係者フォーラム）

これらのことを踏まえ、担当科目で使用するテキストについて、次のプロセスで出版元の許諾を得ることとした。

- ① 使用教材、同時双方向型遠隔授業における当該教材の具体的な使用・送信方法、学生の教材購入の時期及び方法等について出版元に説明。
- ② ①について、「著作権者の利益を不当に害することとなる場合」に当たらないかどうかを出版元が確認。
- ③ 当該教材の公衆送信に係る条件、許諾期間、送信できる教材のリンク先を受領。

使用教材のほとんどが海外の出版物であるため、日本代理店から本国へ問合せ→本国で検討→本国から日本代理店へ回答という流れを辿り、最終的に許諾を得るまでに時間がかかった。前期は遠隔授業となること

が決定的となった3月下旬から動き出し、授業開始までに間に合わせる
ことができたが、出版元との一連のやり取りを通して、改正著作権法や
授業目的公衆送信について改めて認識を深める機会となった。

(4) 同時双方向型遠隔授業で使用するツールの限定化

本学では、学生が各科目を受講する際の共通のプラットフォームとして、
本学のウェブサービス学生支援システムである KCN を使用することが
取り決められた一方で、それ以外のツールについては、科目の特性や
授業方針等によって自由に扱うことが認められた。そこで、筆者が担当
する科目については、次のように対応した。

使用ツール	主な使用目的
KCN	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内容及び評価に関する連絡全般（授業資料の提示を含む） ・ 学生との Q-A ・ ユニット確認テスト、ユニットテスト
Zoom	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同時双方向型遠隔授業 ・ スピーキングテスト等のパフォーマンス評価
Gmail	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内容及び評価に関する連絡全般（授業資料の提示を含む） ※ KCN にアクセスしない学生がいる可能性があることを考 慮し、同内容を Gmail でも配信。
Google Classroom	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動画を中心とした授業資料の提示

当初はより多様なツールの活用を考えていたが、次の2点の理由によ
り、できるだけ単純化した形で授業を展開するようにした。

- ・ 担当科目では、教員と学生及び学生同士での英語を用いたやり取り
が授業の大部分を占めるため、Zoom を中心とした基本的なツール
で対応できる。
- ・ 「College English I」及び「2年次専門研究 I」を履修している学生に
ヒアリングをした結果、教員ごとに使用するツールやアプリケーシ
ョンが異なるため、授業に関する情報の取得や課題提出の際にかな
り混乱していることがわかった。

実際、上記ツールの内、頻繁に利用するのは KCN と Zoom の2つに限
定したが、これまで面接授業で行ってきたことをカバーするという点で

は全く問題がなかった。

3. 同時双方向型遠隔授業における言語活動の展開

(1) 対話的な学びの重視

日本国内で英語学習をする際に大きな課題の一つとなるのが、社会生活において実際に英語を使用する場面がかなり限定されていることである。そのため、授業自体をコミュニケーションの場とすることで、できるだけ英語の使用機会を確保することが重要になる。このことは面接授業でも遠隔授業でも同じことだが、特に遠隔授業では、教員が話したり映像資料を送信したりするだけの一方通行型にならないよう注意する必要がある。また、「授業の中でしかできないこと」と、「授業外（家庭）でもできること」とを分けて考え、遠隔授業であっても同時双方向型であればクラスメイトがいるという状況を踏まえ、次のように教員と学生及び学生同士でのインタラクションが授業の中心となるようにした。このことにより、遠隔授業においても、授業は「聞くもの」ではなく「参加するもの」であるという意識を浸透させることができたと考えている。

インタラクション	Zoomの使用方法
教員 ⇄ 学生	<ul style="list-style-type: none">・学生はミュートを外し、教員からの問いかけに自由に応答する。・発言したい学生は、物理的に挙手をして教員に知らせる。
学生 ⇄ 学生	<ul style="list-style-type: none">・「ブレイクアウトセッション」でペア及びグループを作る。・ペアやグループは固定せず、同じ授業内でも言語活動ごとに異なるパートナーやメンバーと対話できるようにする。 ※教員もペアやグループの活動に入り、必要に応じてサポートをする。

(2) インタラクションに必然性を持たせるタスクの設定

教員と学生、学生同士のインタラクションを授業の基本スタイルとすることは、英語による思考力・判断力・表現力の育成にも大きく貢献す

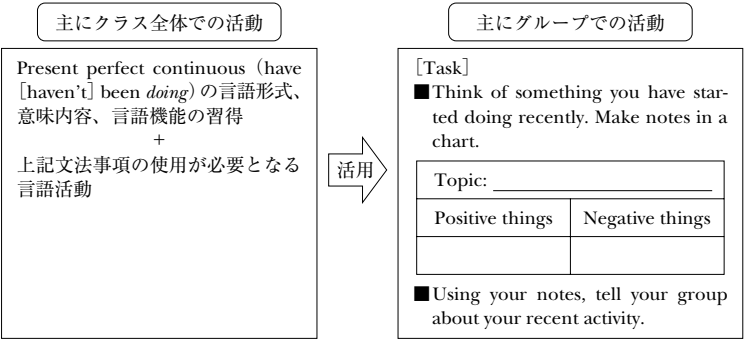
る。その際に重要となるのは、インタラクションを行うことが必須となるタスクの設定である。そこで、学習者が言語形式と実際の言語使用の両者にフォーカスすることが求められる Task-Based Language Teaching (TBLT) (Richards, 2015) に基づいて授業を組み立てるようにした。

[実践例1] 「College English II」(4技能5領域総合型科目)
 単元：Stretch 3 (Oxford University Press) UNIT 6 (授業2コマを配当)
 ○学習目標、指導事項、言語活動

UNIT 6 Recent activities	
Learning objectives: Students will be able to – listen for clues to make inferences. – use the present perfect continuous.	
Vocabulary & Listening	<i>train for a race, do volunteer work, apply for a job, etc.</i> [Skill] Listening for clues to make inferences
Speaking	What people have been doing lately [Skill] Expressing surprise
Grammar	Present perfect continuous
Reading & Writing	Reading: <i>Training for a 5K Race</i> Writing: <i>The best way to do an activity</i> [Skill] Writing a topic sentence with details
Viewing	A record breaker [Skill] Understanding casual speech
Presenting	Positive and negative things about a recent activity [Skill] Giving a balanced view

※太枠は特にTBLTに関係する部分。

○スピーキングを中心としたTBLTの概要



[実践例2] 「College English IV」(4技能5領域総合型科目)

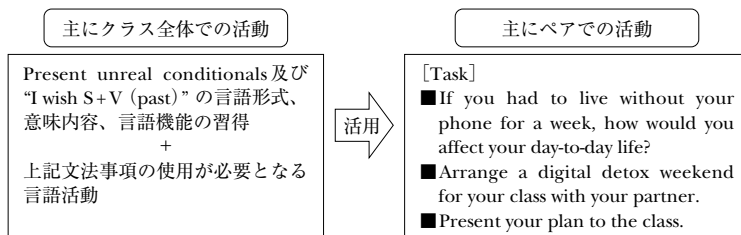
単元: EVOLVE 4 (Cambridge University Press) UNIT 6 (授業5コマを配当)

○学習目標、指導事項、言語活動

UNIT 8 LIFESTYLES	
Learning objectives: Students will be able to – talk about different work lifestyles. – talk about wishes and regrets. – write a comment about a podcast. – plan and discuss a digital detox weekend for their class.	
Grammar	Present unreal conditionals / <i>I wish S + V (past) ...</i>
Vocabulary	Describing jobs / Talking about work-life balance
Functional language	Encouraging actions / Offering a warning
Listening	A podcast debating the benefits of a digital detox
Writing	A response to two comments / Referencing another argument in students' writing
Speaking	Discuss the work-lifestyle connection / Talk about unusual jobs / Talk about wishes and regrets / Offer advice and discuss options / Plan a digital detox

※太枠は特にTBLTに関係する部分。

○スピーキングを中心としたTBLTの概要



(3) 遠隔授業では展開しづらい言語活動の扱い

筆者の担当科目の中で、特に「English Presentation」における各学生のプレゼンテーション及び原則として中・高等学校英語の教員志望者が履修している「2年次専門研究」でのマイクロティーチングについては、遠隔授業での展開が困難であることが予想された。しかし、仮にこれらの活動をしなければ当該科目の教育目標を達成することはできない。そこで、Zoomによる同時双方向型遠隔授業では、次の方法で展開することとした。

	「English Presentation I・II」	「2年次専門研究 I・II」
言語活動	プレゼンテーション (例) A person I admire / A vacation I recommend / A survey I conducted / A news story	マイクロティーチング (例) Warm-up activities / Speaking activities / Writing activities ※テキストで学習した内容の言語活動化
方法	・学生が作成したスライドを画面共有して発表する（通信環境で問題がある場合は、事前にスライドを提出し、教員が操作する）。 ・各プレゼンテーション後に聞き手の学生とQ-Aを行う。	・ペアやグループは、教員がブレイクアウトセッションで作成する。その際、教員役の学生がペア、グループの作成方法と活動時間を伝える。

上記の方法で何度も実践してみると、当初は気付かなかった次の遠隔授業ならではのメリットがあることもわかった。

- ・プレゼンテーションにおいて、教員が教室で使用している1台のPCから各学生のスライドデータを選択して映し出す必要がないため、大幅な時間短縮が可能である。
- ・マイクロティーチングにおいて、活動ごとに生徒役のペアやグループを容易に変えることができる。
- ・活動を録画してクラウドに保存しておけば、教員は後日、録画映像を見ながら時間をかけて評価することができる。また、他科目での授業において類似した活動のサンプルとして、さらに、次年度の同科目の授業において活動のモデルとして示すことができる。

4. 同時双方向型遠隔授業における評価

(1) 評価の方法と回数

総括のための評価は、面接授業では筆記テストやパフォーマンステストを通して行ってきた。遠隔授業においてもこれまでの評価方法と差異がないようにするため、筆記テスト（選択式及び記述式）は主にKCN（一部はZoom）で、パフォーマンステスト（スピーチ、プレゼンテーション等）

はZoomを使って実施した。2020年度担当科目の評価の具体は、次の通りである。

科目(週コマ数)	評価方法	割合	使用ツール	評価回数
College English I・II (2コマ)	・ユニット確認テスト	90%	Zoom / KCN	12・10回
	・スピーキングテスト		Zoom	6・8回
	・e-learning	10%		1・1回
College English III・IV (2コマ)	・ユニットテスト	50%	Zoom / KCN	4・5回
	・スピーキングテスト	40%	Zoom	10・8回
	・言語活動への取組	10%		(随時)
English Presentation I・II (1コマ)	・プレゼンテーション	90%	Zoom	2・3回
	・スピーキングテスト			4・3回
	・スライド等発表準備	10%		2・3回
2年次専門研究 I・II (1コマ)	・スピーキングテスト	30%	Zoom	2・3回
	・テキスト口頭要約	30%		1・2回
	・マイクロティーチング	30%		1・2回
	・言語活動への取組	10%		(随時)

(2) 面接授業時と遠隔授業時の評価結果の差異

「College English I」及び「College English II」で各ユニットの学習後に行う確認テストを面接授業時と同じ方法では実施することができなくなったため、遠隔授業においてはZoomとKCNを使って次の方法を採用した。

「College English I」・「College English II」におけるユニット確認テストの実施方法

時間	領域	設問数	実施方法
約5分	Listening	5問	Zoomを利用。問題（客観式）を提示した後、音声流す。学生は音声を聞きながら解答をメモし、その後、KCNにアクセスして解答を入力する。
約10分	Vocabulary	5問	KCNの「小テスト」機能を利用。学生は、教員がKCN上に作成しておいた問題（客観式及び記述式）の解答を入力する。
	Grammar	5問	
	Reading	5問	

2020年度の確認テストは、面接授業であった2019年度の同科目の確認テストとの差異を見るため、2019年度と同じ問題を使用した。両者の平

均点の結果は、次の通りである。

「College English I」ユニット確認テスト(20点満点)平均点及び平均得点率比較

対象学生：国際学科1年Sクラス(上位30名) ※欠席者は0点扱い。							
年度	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6	平均得点率
2019	18.7	16.7	17.8	16.5	17.3	14.3	2019年度 82.6% 2020年度 82.1% (-0.5%)
2020	17.9	16.2	18.1	17.1	17.0	13.9	
年度	Unit 7	Unit 8	Unit 9	Unit 10	Unit 11	Unit 12	
2019	16.3	16.4	17.3	16.3	16.4	14.3	
2020	17.0	16.0	16.9	16.5	16.8	13.7	

「College English II」ユニット確認テスト(20点満点)平均点及び平均得点率比較

対象学生：国際学科1年Sクラス(上位30名) ※欠席者は0点扱い。							
年度	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6	平均得点率
2019	15.1	13.9	14.5	14.4	15.5	14.6	2019年度 70.5% 2020年度 77.6% (+7.1%)
2020	17.1	14.8	17.1	15.2	16.6	15.6	
年度	Unit 7	Unit 8	Unit 9	Unit 10	Unit 11	Unit 12	
2019	14.4	12.1	13.8	13.0	13.8	14.1	
2020	14.0	15.3	14.9	14.6			

2020年度はCovid-19感染拡大防止のためにプレースメントテストを実施せず、起点となる入学時の英語力を2019年度入学生と比較することができない。そのため、上記確認テストの平均点及び平均得点率の比較はあくまで参考データである。ちなみに、前期末に実施したTOEIC®L&R IPテストの国際学科上位30名の平均スコアは、2019年度(2019年8月5日実施)が515.6、2020年度(2020年8月8日実施)が530.2となっている。

一方、確認テストの平均得点率を見てみると、2020年度入学生は2019年度入学生に比べて前期が-0.5%、後期が+7.1%となっている。前期はプレースメントを実施せずに習熟度別クラス編成を行ったため、クラス分けの精度が2019年度よりも低いと考えられること、また、2020年度入学生の中にはPCやタブレットで解答することに不慣れな学生が少なからずいたこと、さらに、前期末実施のTOEIC®L&R IPテストにおける国際学科上位30名の平均スコアは、2020年度入学生が2019年度入学生より

も14.6ポイント高いことなどを考慮すると、兩年度における確認テストの結果に大差はなく、同時双方向型遠隔授業であっても学生はほぼ同じ学修成果が得られたと考えることができる。

(3) オンラインによる筆記テスト実施上の課題

遠隔授業において筆記テストを実施する場合、受験者側に全方位型の撮影装置を設置しない限り、不正行為を完全に防ぐことはできない。例えば、オンラインで筆記テストを受けている最中に、問題内容についてSNSを使って関係する情報を検索したり、受験者同士で連絡し合ったりすることができてしまう。

しかし、オンラインでも、テストを極力公正に実施する方策を考える必要はある。筆者の担当科目では、「College English I・II」のユニット確認テスト、「College English III・IV」のユニットテストを筆記形式で行ったが、実施に当たって次の5点に留意した。

- ・リスニング問題はZoomを使って同時双方向型で行う。
- ・リスニング以外の問題（語彙、文法、リーディング等）は解答時間をできるだけ短く（「College English I・II」では最大15分間、「College English III・IV」では最大40分間）設定し、問題解答以外のことをする時間的な余裕を持たせないようにする。
- ・「1つだけの正解」が存在する問題だけではなく、与えられたテーマについて、学生が自分の考えや意見などを英語で記述する問題を含める。
- ・大きなテストを1～2回だけ行うのではなく、いわゆる小テストを数多く入れることにより、頻繁に評価機会を設定する。
- ・評価全体に占める筆記テストの割合を極力抑え、思考力・判断力・表現力を測るパフォーマンステストの比重を高くする。

それでも、不正行為防止の点では不十分である。しかし、非科学的な記述にはなるが、オンラインで筆記テストを公正に実施できるかどうかは、教員と学生との信頼関係によるところが大きいと考える。両者に確

固たる信頼関係があれば、目の前に教員がいないというだけで学生が不正行為を働くとは思えないというのは楽観的すぎるであろうか。

5. 学生による授業評価

(1) 授業への満足度

2020年度に同時双方向型遠隔授業を受けた学生は、各授業についてどのような評価をしているであろうか。Covid-19の感染拡大防止のため、学生への詳細なヒアリングを行うことはできなかったが、ここでは過去3年間（2018年度～2020年度）に担当した共通の科目について、本学が年2回実施している「学生による授業評価・調査票」における授業への満足度の結果を示すこととする。

問：「この授業に満足しましたか？」

○科目「College English I」（履修対象学生：1年生）

(%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	77	23	0	0
2019(面接)	64	28	4	4
2020(遠隔)	38	58	4	0

○科目「College English II」（履修対象学生：1年生）

(%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	68	27	5	0
2019(面接)	77	19	4	0
2020(遠隔)	35	65	0	0

○科目「College English III」（履修対象学生：主に2年生）

(%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	67	33	0	0
2019(面接)	41	59	0	0
2020(遠隔)	86	14	0	0

○科目「College English IV」(履修対象学生：主に2年生)

(%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	80	20	0	0
2019(面接)	78	22	0	0
2020(遠隔)	94	6	0	0

○科目「専門研究 I」(履修対象学生：2018年度3年、2019年度4年、2020年度2年) (%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	29	71	0	0
2019(面接)	71	14	14	0
2020(遠隔)	85	15	0	0

○科目「専門研究 II」(履修対象学生：2018年度3年、2019年度4年、2020年度2年) (%)

年度(方式)	大変満足した	満足した	少し不満	とても不満
2018(面接)	29	57	14	0
2019(面接)	43	57	0	0
2020(遠隔)	91	9	0	0

(2) 授業への満足度における新入生と2年生以上の学生との相違

上記「学生による授業評価・調査票」では、1年生が履修する「College English I」と「College English II」について、2年生以上が履修する他の科目とは明らかに異なる点が認められる。2020年度の結果を2019年度と比較すると、「大変満足した」と回答した学生の増加割合は、これら2科目以外では、「College English III」で45%、「College English IV」で16%、「専門研究 I」で14%、「専門研究 II」で48%となっている。一方、「College English I」と「College English II」では逆に減少しており、前者は26%、後者は42%もマイナスになっている。

これら2科目では2019年度、2020年度とも同一の教材を使用しており、面接授業と対面授業の違いはあるものの、指導内容はほぼ同じである。それにもかかわらずこれだけの差が出ていることの要因の一つとして、教員と学生、学生同士が一度も会っていない状態で授業を行ったことに

あるのではないかと考えている。学生は、担当の教員がどのようなタイプの人物であるのか、クラスにはどのような仲間がいるのかといったことが表層的にしかわからないため、どこかよそよそしい雰囲気が漂う。このことは、2年生以上が履修する科目では、Zoomによる授業でほとんどの学生が自主的にビデオをオンにしていたが、1年生は徐々にその割合が減っていたことからわかる。

少なくとも「学生による授業評価・調査票」からは、面接授業を経験していない状態で遠隔授業に臨まなければならない場合、授業への満足度に大きな影響を及ぼす可能性があることが推測できる。これは、面接授業を1年間でも経験した場合は、教員と学生、学生同士の間に多少なりともラポール（信頼関係）ができているからではないだろうか。

6. 終わりに

1年間にわたって同時双方向型遠隔授業を実践し、面接授業時とはほぼ同じ指導と評価ができること、また、教材の準備や提示などにおいては、面接授業に比べて少なからずメリットがあることもわかった。一方で、面接授業で行ってきたことのほとんどを遠隔授業でもカバーできるということは、今後、面接授業でこれまでと同じような授業展開をした場合、学生からすれば「これは遠隔授業でもできるのでは」と感じるようになるだろう。つまり、面接授業では、今まで以上に質の高い内容が求められることになる。

対面においてしかできないこと、対面の方が効果的であることは何か。例えば、自チームの論の優位性を示すディベートでは、相手チームからの主張を受けて、メンバー同士が協力して自チームの議論を建て直す必要があり、このような言語活動は遠隔授業においては難しいだろう。また、教員の側では、ペア・ワークやグループ・ワークを一斉に見渡し、躓いているペアやグループに対して即座に適切なサポートを与えるためには対面である必要がある。

今後、再び長期にわたって遠隔授業をしなければならない状況になることは十分考えられる。また、そうならないとしても、ビジネスの世界でリモートワークが急速に定着しつつあるように、教育の場でも面接授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド方式が浸透していくことになるかもしれない。いずれにしても、2020年度に遠隔授業を経験した知見を生かし、面接授業と遠隔授業の双方で学生の学修成果をより高めていく方策を模索していきたい。

(参考文献)

敬愛大学 (2018-2020), 『学生による授業評価・調査票』

著作権の教育利用に関する関係者フォーラム (2020), 『改正著作権法第35条運用指針 (令和2〔2020〕年度版)』, 8-10

文部科学省 (2009), 『高等学校学習指導要領』「第8節 外国語」, 92

Goldstein, Ben & Jones, Ceri (2019), *Evolve Level 4 Student's Book*, Cambridge University Press, 75-84

Richards, Jack C. (2015), *KEY ISSUES IN LANGUAGE TEACHING*, Cambridge University Press, 89

Stempleski, Susan (2014), *Stretch: Level 3 Student Book with Online Practice*, Oxford University Press, iv-v & 34-39